



『生きるための熱の源は、人だ。
人によって遺され、繋がられていく。
それが熱だ。』

2作目で異例の直木賞を受賞
ふわっとした気持ちで始めた

「信じられない。まだドッキリが進行しているような気分です——。」

1月15日に帝国ホテルで行われた「第162回直木三十五賞」受賞者の記者会見でそう答えた川越宗一さん。錦江町生まれ、大阪育ちの41歳「デビュー作『天地に燦たり』で松本清張賞を受賞し、自身2作目となる長編歴史小説『熱源』で直木賞を受賞。『熱源』は本屋が選ぶ時代小説大賞にも選ばれ、W受賞となる異例の快挙です。文学賞の発表当日は、記者会見会場にすぐ駆け付けられるよう関係者と一報を待ちます。宴会をしながら待つ、通称「待ち会」を開催する作家さんも多いそうです。

「今回は文藝春秋さんの会議室で担当の編集さんと2人で待ちました。ちょうど取材も入っていたので気を紛らわすために発表日に入れてもらったんです」と当日を振り返る川越さんには待ち会をしなかった理由が——。



「以前、山田風太郎賞の候補に選ばれたとき4人で連絡を待ったんですけど、落選してほったらかし状態に（笑）。集まってくれた方に落ちたと言っただけ結構辛いので、次は最小人数で待つと決めてました」と受賞日の様子を笑って振り返ります。30代後半で小説を書き始めた川越さんですが、そのきっかけは新しい趣味を見つけたという意外な理由。「ふわっとした気持ちで書き始めたんです。小説なら文字を書くだけでお金もかからないし。そして書き上げた1作目の天地に燦たりを応募したんですが、あっさり落選。そのとき初めて自分の気持ちと題材への愛着に気付いたんです。悔しい。この作品をどうにか世に出したいという思いで一から勉強し直しました。改稿して再応募しての受賞でした」と話すデビュー作の天地に燦たりは、「とても幸福な読書だった」「激しく心揺さぶられた」と選考委員から高い評価での受賞。川越さんが小説家としての一歩を踏み出した瞬間でした。

【熱源】直木三十五賞 / 本屋が選ぶ時代小説大賞

「人に決められる、自己決定できないことの理不尽さ」



日本人にされそうになったアイヌと、ロシア人にされそうになったポーランド人。文明を押し付けられアイデンティティを揺るがされた経験を持つ二人が出会い、自らが守り継ぎたいものの正体に辿り着く。国家や民族を超え、人が共に生きる姿を描く長編歴史小説。

【天地に燦たり】第25回松本清張賞受賞作

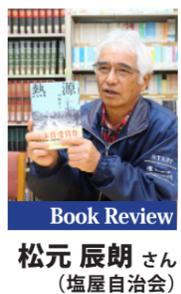
「戦を描く作品の主軸に、義でも忠でもなく礼を選んだ」



戦のなかでしか生きられない島津の侍大将。被差別民でありながら、儒学を修めたいと願う朝鮮国の青年。自国を愛し、「誠を尽くす」ことを信条に任務につく琉球の官人。豊臣秀吉の朝鮮出兵により侵略の風が吹き荒れる東アジアを、三つの視点から描いている。

「歴史や時代を作った英雄ではなく、その時代を強く生き抜いた人たちに焦点」

豊臣秀吉や大野七郎久高、西郷従道と歴史上の人物が登場しますが、川越さんの作品は変わりがなく、激動の時代に巻き込まれながらも生きていく人たちが、つまり一般の人に焦点が当てられています。歴史に名を残すような英雄が主人公ではありません。歴史小説では珍しい作品で、平和な時代の日本で生活していると、あまり感じることもない「生きる」ことについて考えさせられます。生きるための熱の源、困難な時代を生き抜いた人たちのモチベーションなど2作品から熱い思いを感じました。



第162回「直木三十五賞」受賞 錦江町生まれ

川越 宗一 さん (京都府在住)

わずか2作目での直木賞受賞という快挙。小説家、カタログ通販会社の社員と二足のわらじを履く錦江町生まれの小説家 川越宗一さんが描きたかった世界、小説を通して私たちに伝えたいメッセージとは——。

「直木賞三十五賞」とは？



文藝春秋の創業者である菊池寛氏が友人である直木三十五の名を記念して、芥川賞と同時に昭和10年に制定した賞。年2回、大衆小説作品（長編小説もしくは短編集）のなかから最も優秀な作品に贈られる賞です。「直木」は本名植村宗一の「植」の字を分解したもので、「三十五」は年齢を元にした筆名。31歳のときに直木三十一の筆名で執筆を始め、以降は誕生日を迎えるごとに「三十二」、「三十三」と名前を変えていたが、筆名の変えすぎでお叱りを受けたことから「直木三十五」で定着させたとされているユーモアのある作家です。